

たかが愛の歌よ、

作・こさへあきひろ

【登場人物】

萩尾美和子 …… 雑誌の編集者。指名手配中の武藤舞を追っている。

沢尻涼子 …… 武藤舞の知り合い。

島田佐由子 …… 武藤舞と同棲していた女。

下山ゆう …… 武藤舞の中学の頃からの友達。

武藤美穂 …… 武藤舞の母。

島田奈々子 …… 島田佐由子の母。

カナ …… 孤児。

犬 …… 美穂が飼っている犬。

電車が停車し、すぐに発車していく音がきこえる。

昼間。そこは小さな駅の前だろうか。

くたびれた服を着て酒瓶を持ち座り込んでいる女、沢尻涼子が地面に座り込んでいる。脇にはカバン。

涼子とは対照的に、パリッとしたシャツを着た女、萩尾美和子が現れる。

美和子は誰かをさがすようにあたりを見回している。

涼子は美和子を見ている。

途中、美和子と涼子は何度か目が合い、軽く会釈したりするが、美和子はまだ誰かをさがしているようである。

美和子はなんとなく涼子と関わりたくなさそうである。

美和子はスマートフォンを取り出し、誰かに電話をかける。

と、すぐ近くで着信音が聞こえる。

涼子は、美和子をみながら自分のスマートフォンを取り出し、美和子にアピールする。

美和子は涼子と目が合っていたが、さっとそらし、相手が電話に出るのを待つ。

涼子は電話に出る。

美和子 ……もしもし？

涼子 もしもし。

美和子、やっぱりこの人かあ、という反応。

美和子 (なおも電話越しに) すみません、あの、そうかなって思っ
たんですけど、

涼子 (電話越しに) 悪いですか。

美和子 (電話越しに) まったく。

涼子 (電話越しに) 切っていいですか。

なぜか見つめ合う二人。

美和子 ……あ、この度はありがとうございます。ええと、沢尻涼
子さん、

涼子、手を差し出す。

美和子 あ、はじめまして。(握手しようとする)

涼子 (その手をはじいて) そうじゃなくて。

美和子 あ、すいません、(名刺を出しながら) 私、週刊真相の萩尾美
和子といます、

涼子 違う、

涼子、いらいらしながら、なおも手を差し出してなにかを要求している。

美和子 ええと……、

涼子 なんかないんすかその、腹減ってて、

美和子 あ、あーあー。ええと、(カバンの中をあさって、あんぱんを出
す) あんぱんでよければ。

涼子 なにあん？

美和子 はい？

涼子 こしあん？ つぶあん？

美和子 つぶあんです。

涼子 (受け取りながら) 相容れないな。

といつつもぱんにかぶりつく。

夢中でぱんを食べ、あつという間に食べ終わる。

美和子 ……どこか、近くの喫茶店とかに移動しましょうか。

涼子 山、好きですか？

美和子 山？

涼子 行きましょうか。

涼子、二、三步進むが、美和子が歩かないのですぐに振り向いて。

涼子 行かない？ 帰ります？

美和子 帰りませんよ。

涼子 あたし、嫌いなんですよ。あんたみたいなパリッとした奴。

美和子 ……。

涼子 わかってますよ、あんただって嫌いでしょう、あたしみたい

な、こういう人間。

美和子 ……さあ。

涼子 ま、どっちでもいいです。ただ、あんたさあ。

美和子 なんですか。

涼子 (笑いながら) 思ってたよりかわいくねえな。(行く)

美和子 はあ？

美和子も追うように去っていく。

音楽。

2

ロッジ。

下山ゆうがいる。

スマートフォンをいじっている。

美和子と涼子が入ってくる。

ゆう ああ、いらつしやい。

涼子 へへ、少し遅くなっちゃった。

ゆう ……。

涼子 あ、ほら、(自分を指さして) 沢尻涼子。

ゆう 沢尻……、

涼子 ほら昨日電話した、沢尻涼子。

ゆう ああ、あーそうそう、沢尻涼子。沢尻涼子ね。そうだそうだ。
涼子 なにちよっと、

ゆう あのほら、昨日電話では話したけどさ、こう、直接会うのつ
てちよっと久しぶりだからさ、

涼子 変わった？ どう？

ゆう うん、かわいくなつたよ。うん、あとちよっとやつれたかな。

涼子 最近ロクに食べてなくなつてさ。

ゆう そちらが、

美和子 あ、

涼子 そうそう、あたしにお酒おごってくれるっていう優しいお姉
さん。

美和子 いやあの、

涼子 お金ないんすよ、その分話しますから。

美和子 このロッジの管理人ですか？

ゆう そうそう、セミリタイみたいなの？

美和子 その歳ですか。

涼子 ゆうちやんすごいんですよ。

ゆう つて言っても、親が趣味で買った建物相続しただけですけど
ね。

美和子 え、親御さん……、

ゆう まあ生きてりや色々ありますよ。(涼子に) なんにする？ マ

ムシの酒が入ってさ、高いんだけどどう？ あとこれとか。(注射

器のジェスチャー)

美和子 ちよっと待ってください。

ゆう マムシ酒嫌いですか？

美和子 じゃなくて、(ジェスチャーをまねながら) これつて。

ゆう 冗談ですよ。

美和子 言っつていい冗談と悪い冗談があります。

涼子 この人、東京人だから細けえんだよ。

ゆう あーどうせあれだ、埼玉バカにしてんでしよう。ダサイタマとかいって。

美和子 バカにはしてません。

ゆう じゃあ飲みます？ マムシ酒？

美和子 いや、私は仕事なので、

ゆう いけすかねーな。あんたは？

涼子 あーいや、マティーニが飲みたいな。

美和子 そんなのあるんですか。

ゆう あ、バカにした。

美和子 そうじゃなくて。

ゆう ロッジ兼バーなんです。文句あります？

美和子 ないです。

涼子 今までの人生でさ、あたし、ゆうちゃんの作ってくれるマティーニが一番うまいと思うんだよ。最後だしさ、やっぱりゆうち

やんのマティーニが飲みたいよ。

ゆう ……そっか、うんオツケー。(美和子に) あんたは？

美和子 「最後」って？

ゆう 酒飲めないんだったら、ウーロン茶とかでいいかな、作るの面倒だし。

美和子 ああ、はい。

ゆう、奥にひっこむ。

美和子 ……お話、きかせてもらえますか。指名手配中の、武藤舞のこと。

涼子、鼻歌を歌う。「かごめかごめ」を途中まで。

涼子 これ。やったことある？ 子供の頃。

美和子 やったようなやってないような。

涼子 今冷静に考えると、なかなかひどいゲームだな。10人とかでやるとき、ようは、鬼がひとりで、9人が囲むわけじゃない。ってことは9分の1だよ、あたる確率。あたしずっと当てられなくてさ、泣いて帰っちゃったことあるよ。

美和子 そうですか。

涼子 あの歌詞の意味、知ってる？ あれね、自由のない遊女を、

ゆうが戻ってくる。

ゆう おまちどうさま。ウーロン茶と、マティーニ。

涼子 あーこれだよこれ。飲みたかったあ。いただきます。

涼子、そのまま飲み干してしまう。

グラスを置き、泣くのをこらえているようである。

ゆう ……なあ、やっぱさ、この人には帰ってもらった方がいいんじゃないかな。

涼子 いや、いいんだよ。

ゆう もちろんさ、人を殺したっていうのは、悪いことだと思っよ。

でも、まいちーだつてさ、悪い奴じゃないんだよ。

美和子 そのまいちーっていうのは、

ゆう ……武藤舞のことですよ。

美和子 武藤舞のことを知ってるんですか。

ゆう 中学からの同級生ですよ。高校卒業してからもけっこうつる

んだりしてたんですけど。

美和子 お話、きかせてもらえますか？

涼子 いや、あたしから話すよ。

ゆう いいの？

涼子 本人も望んでることだよ。

美和子 もしかして最近武藤舞と連絡をとったり？

涼子 ああ、まあ。

美和子 今どこにいるかも知ってるんですか？

ゆう まあまあまずさはさ、話をききましようよ。

美和子 ……。

涼子 あんたは、どこまで知ってる？

美和子 どこまで？

涼子 事件のこと調査してんだろ。知ってる話すんの嫌だからさ。

美和子 (メモ帳を開いて) ……武藤舞。28歳。同棲中だったSさ

んを殺害した容疑で現在指名手配中。そのほか10歳のKちゃん

という女の子を殺害した容疑、母親の飼っていた犬を殺した容疑

もかけられている。

涼子 そういうんじゃないくて、こう、あんたが独自に調べてわかつ

たことをさ。

美和子 武藤舞は裕福な家庭に生まれたが、夫婦仲は悪く、ことあるごとに、特に母親から暴力を受けていたらしい。大学進学のと

きに東京で一人暮らしを始める。しかしその後父親の会社は倒産。大学に通えなくなり、飲食店でバイトをし生計を立てる。

涼子 ……ふうん、そんなところ？

美和子 それと…私、会ったことがあるんです。武藤舞に。

涼子 ……。

美和子 そのときは、まあ悪い人という感じはしませんでした。ど

こにでもいる、ふつうの女性という感じで。でも、私は騙されて

たんだと思います。

涼子 そう。

美和子 さあ、話しましたよ。あなたの番です。

涼子 まだあるんじゃないの？

美和子 これ以上は言いません。私ばかり喋って不公平ですから。

涼子 ……まあいいや。どこから話しましょう？ 武藤舞のことは

昔から知っていて、まあ幼馴染みたいな。さつき武藤舞に会った6

つて言っていましたけど、どうでした？

美和子 どうって。

涼子 顔。美人でした？

美和子 うーん、まあ、普通よりちよつと、かわいいかな、くらい

でしたかね。

涼子 整形してるんですよ、武藤舞。子供の頃はもつと、こう、お

世辞にも美人とは言えなかった。

美和子 ブスだったってことですね！

涼子 はつきり言わないでよ、あたし今言葉選んでたでしょ。

美和子 で、ブスだったのがどうしたんですか？

涼子 なんかあんた酒臭いな。これウーロン茶でしょ？
ゆう あ、酒入れた方が面白いと思ってウーロンハイにしちゃった。

涼子 マジか、にしても酒弱いだろ。

美和子 でブスだったのがなんだったんですか！

涼子 うんまあ、だから、コンプレックスだったっていうか、けっこう気にしてたみたいなんです。本人的に。

美和子 ふーん。

涼子 いや、本人的にっていうよりは、母親がね、気に入らなかつたみたいで、自分から生まれてきた子供がブスだったのが。だからもう、子供の頃から愛情なんか全然なくて、まいちー、母親からあんたあんたって呼ばれてて、子供の頃、自分の名前って言うかあだ名？ 「あんた」だと思ってたくらいで。

美和子 それはまあ、かわいそうですね。

涼子 まあ、でもなんかまいちーもマジメなやつでさ、親に恥をかかせたくないみたいなこと思ってたらしくて、せめて勉強くらいはできないとって、そこそこ勉強してたみたいだけど。東大受験したけど落ちちゃって、ま、落ちたっていうか、泊まったホテルで火災が起きちゃって、受験票置いて避難しちゃって受験できなかつたみたいです。

美和子 あ。

ゆう ん？

美和子 そのホテル、私も泊まったかも。

涼子 マジ？

美和子 私も、東大受験してて、ホテルで火災が起きたんです。だからたぶん、

涼子 同じホテルに泊まったってこと？

美和子 ま、私は東大合格しましたけど。

ゆう (涼子に) こいつなんかむかつくな。

涼子 ま、どうせ受験しても東大なんか無理だったみたいですけど。

それで滑り止めの大学に行って、東京で一人暮らし。まいちーのおばさんもたぶん早く家からまいちーを追い出したかったんじゃないかな。すぐにかわいらしい犬を飼って、溺愛してたみたいで。

美和子 だいたいね、そういう親がね、日本をダメにする。もー全然ダメ。

ゆう あんたただの酔っぱらいじゃねえかよ。

涼子 ほどなくして父親の会社は倒産、両親は離婚し、まいちーは大学を辞めて、飲食店でバイトをはじめました。あいつもバカでさ、母親のために結婚しようとか、考えてたんですよ。

美和子 まー健気ってことは認める。

涼子 まあひとまず彼氏をつくらうってことで、友達と一緒に合コンに行きました。

美和子 えー武藤舞はさ、どんな感じのブスだったの？

ゆう あんたタチ悪いよ。

涼子 たとえるなら、おかめみたいな顔だったな。

美和子 おかめって、おかめ？

涼子 (おかめの面を取り出し) そう。

3

居酒屋。

「イエーイ」と盛り上がっている声。

涼子はおかめの面をつけ、武藤舞になる。

席には、舞とゆう、そしてなぜか美和子。

ゆう (立ち上がって) はい、下山ゆうでーっす！ 私はマジで、将来ビッグになる女ですから、マジで、教科書に名を残すくらいの、アメリカでいうところの、こう、エリザベス女王的な？

舞、ゆうになにか喋る。

ゆう え、なに？ イギリス？ いいんだよ細かいことは。そういう国境すら超越する、それくらいビッグななにかに、将来的にはなるんで、よろしくう！

美和子 イエーイ！ (など盛り上げる。)

舞、立ち上がって、自己紹介しようとするが、モゾモゾしてしまう。なにか言っているが、声が小さくてききとれない。そのたびに、ゆうが「え？」「え？」と聞き返し、しびれを切らしたゆうが舞の小さな声をききとりながら紹介を始める。

ゆう はい、この子はまいちーでーす！ うん？ 趣味は、うん、読書でーす！ なに？ 昔の？ 昔の名作が好きで、うん、中でも一番好きなのが、フランケンシュタインでーす！ 趣味地味だなあんだ。よろしくお願いまーす。

ゆう・美和子 イエーイ！ (拍手、などとにかく盛り上げる)

美和子 (立ち上がって) はい、萩尾美和子でーっす！ ちくびーむ！ あれ？ ひいてる？ ひかれても気にしませーん！ 彼氏いませーん！ 誰かお持ちかえりしてください！ よろち

くびー！ イエーイ！

ゆう ……イエーイ！ (など盛り上げる)

沈黙。

美和子 いやいや、ちよつと待ってちよつと待って、

ゆう なんすか。

美和子 なんか！ 私が登場してるんですが！ しかもかなり恥ずかしい感じで！

ゆう あ、思い出した、どっかで見たことあると思ったら！

美和子 待って！ 思い出さないで！ 嘘だ！ 捏造だ！

ゆう あのと きもう一人連れてこようと思つてたやつが急にドタキャンしやがって、

美和子 知らない！ 私は合コンなんか行った記憶ない！

ゆう 数合わせでそのへんの酔っぱらい連れてきたんだ。あんたあいつか！

美和子 あー知らないー。

ゆう あんた見るからに酔っぱらいながらご機嫌で街歩いてたから、「イケメンが来る合コンに来てみない？」って言ったら「え、行くー！」って言ってホイホイついてきただろ！

美和子 アイ！ ドン！ ノウ！

ゆう しらばつくれんなよ、なんだよちくびーむって。

美和子 あーきこえないーきこえないー。つてちよつと待って！ じゃあ私ここで武藤舞に会ってるってこと？

ゆう まあそういうことになるな。

美和子 そんなはずない！ だつてもしここで会つたら、その次

に会ったときに、あのときのあの人だつてわかるはずだもん！
ゆう だから整形する前の武藤舞だったんでしょ。

美和子 そっか。あ！ 思い出した！ おかめみたいな顔のやついた！ あいつか！ あのブスカ！ つっか、あなた！ よくよく見たら、あのときのエリザベス女王とか言つてた変な人！

ゆう 今更驚くなよ。そうなんだよ。

美和子 イケメンとか言つてたのに全然イケメンじゃなかったじゃん！

ゆう 右端に座つてたやつ若干イケメン風だったじゃん。

美和子 いや、若干イケメン風つてもはやイケメンじゃないですし！ しかも位置的に私から遠かつたですし！ 私の正面、ゴリラみたいでしたし！

ゆう ゴリラでもいいだろ。ゴリラは心優しいんだよ。

美和子 心優しくてもゴリラですし！

ゆう でも金持ちだっただろ、

美和子 う、まあ。

ゆう 私覚えてるからね。あんたがゴリラに食い下がつてたの。

美和子 ねーえヒロシさん、ヒロシさんはあ、顔はゴリラみたいかもしれないけどお、でもゴリラつてかわいいしい、

ゆう (美和子をなだめている) まあまあまあ、

美和子 つっかブサイクでも、金持つてるならオツケー！ そこは自信もつていいと思いますよお。

ゆう うん、ちよつと一回落ち着こうねー。

美和子 ねーえ、お持ち帰りいー、お持ち帰りいー、

ゆう ゴリラすつげえ苦笑いしてたよ。

美和子 返す言葉ありません。

ゆう 結局、最後は葬式みたいな雰囲気になつちやつたもんね、あんた以外。

美和子 私は常にハイでした。

ゆう はい、じゃあ今日の反省会を始めます。

美和子 イエーイ！

ゆう まずひとつめ。

美和子 はい！

ゆう ……お前誰だ。

美和子 みわこです。

ゆう 帰れ。

美和子 すみませんでした。シュツシュツ。(帰る)

ゆう うん、これはもう完全に私のミスだから、謝る、ごめん。あんなヤバイやつだと思つてなかつた。はい、じゃあふたつめ。

舞 ……。

ゆう もうちよつと喋ろうよ。これなに？ 合コンだよ？ 喋つて

なんぼだよ？ まあさ、中学も高校も女子校だったしさ、こう、男の人とどう接していいかわからないのもわかるけどさ、

舞、無言でゆうの腕に身体を寄せ、全身震える。

ゆう うん？ なに？ 怖かつたの？

舞、震えながらうなづく。

ゆう　　まったくまいちーはさ、やっぱ私がついてなきやダメだね。でもまいちーもさ、いずれは結婚するわけでしょ。いつまでも私に頼りっぱなしじゃやってけないよ。

舞、もじもじしている。

ゆう　　いい？　恋愛ってのはさ、理屈じゃないんだよ。直感？　的な？　出会った瞬間にビビッてくるもんなんだよ。それがやっぱり運命の人？　的な？　そういうやつに出会ったらさ、もう絶対そいつを離しちやダメなんだよ。わかった？　要は、フィーリング？　的な？　フィーリングでフォーリンラブ？　的なやつだよ。まあ私は恋愛とかどうでもよくてさ、要はビッグになりたいうってことなだけだよ。わかる？　わからないか。私さ、ビッグになる方法思いついたんだよ。教えてほしい？　教えてほしいよね。やっぱ今の時代メディアなんだよ。メディアを制する者は世界を制す？　的な？　ま、私がビッグになるの楽しみにしててよ。

舞、拍手。

ゆう　　じゃあまたね、元気でね。

ゆうは去っていく。

舞、歩き出そうとすると、酔っていてよろめく。

歩いてきた目の不自由な女、佐由子とぶつかってしまふ。

舞は謝りながら佐由子を起こす。

佐由子の顔を見た舞は、ビビッてくる。

佐由子　ああ、すみません、ありがとうございます。

舞、佐由子の耳元でなにか言っている。

佐由子　え？　ビビッときた？　ああ、そうなんですね。

舞、佐由子の耳元でなにか言っている。

佐由子　ああ、そうなんです、目が不自由で。あの、親とはぐれてしまつて、それで、電話もどこかに落としたみたいで。

舞、佐由子の耳元でなにか言っている。

佐由子　え、ああ、あの、ピンク色のちよつとゴツゴツしたケースに入っているんですけど、

舞、道端などを捜し始める。

佐由子　あの、いいですよ、そんな。

舞、捜し続けている。

佐由子 本当、お気になさらず、

舞、佐由子のスマートフォンらしきものを持ってきて、佐由子に握らせる。

佐由子 あ、ありがとうございます。たぶん、私のです。

舞、佐由子の手を取る。

佐由子、握手する。

舞、軽くハグする。

佐由子も応じる。

舞、佐由子の耳元でなにか言っている。

佐由子 え、ああ連絡先ですか、いいですよ。

美和子が現れ、佐由子は去っていく。

美和子 ……これが被害者Sとの出会いだったわけですね。

涼子 (面をとって) そうみたいです。その後ふたりは連絡を取り合うようになったらしくて、

美和子 ここで出会わなければ。Sさんが殺されることもなかったわけですね。

涼子 出会うべきじゃなかったんですね。二人は。

ゆう あんたがもつと合コン盛り上げてくれて二軒目に行けてたら出会わずに済んだんじゃない？

美和子 ……。

ゆう 冗談だよ、しんみりすんなよ。

美和子 いえ、本当のことですから。

ゆう ……なんか飲みます？

美和子 いえ、大丈夫です。つづきを。

涼子 まいちーの話じゃ、二人は連絡を取り合って、たまに会ったりもしてたみたいです。なんか、Sさんかなりアクティブな人だったみたいで、二人で登山したとか言い出したらしいんですよ。まいちーも危ないんじゃないかって言ったらしいんですけど、結局無理して行ったみたいです。それがちようど、この山ですよ。ここがまだバーじゃなかった頃、二人でここで休憩したりして。まあ案外楽しかったみたいです。その夜、Sさんはまいちーの家に行ったりしたみたいです。Sさんの家、けっこう金持ちだったみたいで、まいちー、Sさんと一緒になれば、親の生活も楽になるんじゃないかって思ってたみたいです。

美和子 ……。

涼子 冬の日だったかな、まいちーは自分の母親が住んでるボロアパートに行ったんですよ。

涼子は面をかぶり舞となる。このときの面は上半分だけで口元は空いている。

ストーブさえつけられないのか、母はかなり着込んでいる。
部屋の隅では犬が寝ている。
美穂はずっとスルメイカをしゃぶっている。

美穂 なんか、久しぶりね。
舞 うん。これ。

と言って、舞は美穂にコンビニかスーパーかで買った大量の食べ物が入ったレジ袋を渡す。

美穂 うん。(と言って、そこから商品をひとつとり食べ始める)

舞 あと、そんなになんないんだけど。(金が入ってそうな封筒をわたす)

美穂 うん。(受け取って中身を見て、封筒を脇に置く)

舞 今日は話したいことがあつて。

美穂 あんた、そんな顔だったっけ？

舞 え？ うん、そうだけど……変わった？

美穂 いや、久しぶりにみたらブスだなと思つて。

舞 (無理に笑つて)昔からこの顔でしょ。

美穂 でなに、話つて。

舞 ああうん、ちよつと今、仲のいい人がいて、

美穂 ふうん。

舞 その人と一緒になろうかなつて思つてて。

美穂 結婚？

舞 あー結婚っていうか……でも、その人の家、けっこうお金あつてさ、そしたらお母さんにも少しは楽させてあげられるかもつて思つてさ。

美穂 そう。

舞 ただ、ちよつと目が不自由な人なだけどさ。

美穂 面倒みないわよ。

舞 ああうん、それは大丈夫。それでその、その人っていうのが、女の人なんだよね。

美穂 ……。

舞 だからその、結婚っていうか、まあその、二人で一緒に住もうかなつて思つて。

美穂 やめといたら？

舞 ……。

美穂 あんたのためにならないわよ。

舞 ……あーうん。

美穂 世間から後ろ指さされて生きるのつらいわよ。つーかあんなさういうあれなの？

舞 ……。

美穂 はーそれでか、あんた彼氏とか私に見せたことなかったもんね。

舞 あの、もちろん、男の人と結婚するのが普通だと思うんだけど、でもやつぱり男の人好きになれなくて、合コンとかも行ったんだけどさ、

美穂 あんた合コンなんか行ったの？

舞 あ、うん、でもやつぱ、なんかダメでさ。でも、お母さんの生活も楽にしてあげられると思うし、

美穂 いいわよそんなの。なに、私が悪いつて話してるの？

舞 いやそうじゃなくて、

美穂 あんたもつとまっとうに生きてたら？ どこでそういう変な

趣味教わったのよ。ねえ？

舞 あー、ごめんなさい。

美穂 ごめんじゃなくて。

舞 はい、

美穂、舞をなぐる。

舞 ……。

美穂 ねえ、私に恥かかせないで。自分の娘がそういう気持ちの悪い趣味って、世間様に顔向けできないでしょ。

舞 いや、趣味じゃなくてさ、

美穂、もう一度なぐるうかと手をあげる。

舞は、びくっとして黙る。

美穂 ねえ、別に私はあんたが憎くて言ってるんじゃないのよ。あんたのためを思って言ってるのよ。一生日陰でこそこそしながら生きていきたいの？

舞 ……うん、ごめん、やっぱりそうだよね。

犬が美穂のもとにすりよってくる。

美穂 んー？ どうしたさーちゃん？ さむいのー？

犬、美穂にくっついて落ち着く。

美穂は犬をなでる。

美穂 話したいことはそれだけ？

舞 あ、うん。

美穂 あそう。

チャイムの音。

美穂 (舌打ち) はい。

美穂が扉をあけると、ゆうが入ってくる。

ゆう あの、すみません、毎朝新聞の者だったんですけども。

美穂 あ、間に合ってますから。

舞 ゆうちゃん？

ゆう あれ、まいちーじゃん、え？ あれ？ まいちーのおばさん……？

美穂 久しぶりね。ゆうちゃんが高校生だったとき以来？

ゆう ああ、ええ。……引越されてたんですね。

美穂 ああ、そうね。

ゆう それに、ちよつと感じも変わって。

美穂 みすばらしくなったって言いたいの？

ゆう ああ、いえいえそうじゃなくて単純に、

消防車の音が聞こえてくる。

美穂 なにかしら。(外で煙があがってんのが見えて、嬉しそうに)あれ、

なんかあそこ煙出てるわよ。わ、あ、燃えてる。ほら、あそこ。
ゆう あー。

美穂 あ、あそこあいつんとこじゃない。パート先のクソババアが
いるんだけど、あいつんちあの辺よ、燃える燃える、ひひひ、ち
よっと見てくるわ。

ゆう あ、はい。

美穂は去っていく。

ゆう まいちーのおばさん、あんな感じだったっけ？

舞 うん、お父さんの会社が倒産して離婚してから。いや、その前
からあんな感じだったかな。

犬 ワンワン、

ゆう わーびっくりした。

舞 私が一人暮らし始めたら飼い始めて、溺愛。

ゆう ふーん。

舞 っていうか、ゆうちゃんなにしてるの。

ゆう うん？ メディアをコントロールしてんだよ。

舞 新聞の勧誘？

ゆう メディアをコントロールしてるんだよ。

舞 あ……そう。

ゆう でも私気づいたよ。メディアをコントロールするのも大変だ
なって。なんか、嫌な顔されること多いし。ほら、私ってチャホ
ヤされたいじゃん？ それになんつーか、やっぱ自分の足で稼ぐ
んじやなくてさ、もつとこう、人を駒のように扱って稼ぐ？ 的
な？ 経営者？ 的存在？ っていうのがさ、やっぱ私には似合

ってると思うんだよ。

舞 あーそっか。

ゆう まいちーもさ、しょっぺーアルバイトなんかしないでさ、私
みたいにガツンと一発っていうのをさ。無理か、まいちーにそん
な度胸ねえか。私がないとなんにもできないもんな。

舞、ゆうにすぎるようにくっついて。

舞 ゆうちゃん、ゆうちゃん、

ゆう なんだよ、なんか悩んでんの？ わかった。私今からすげえ
いいこと言うからちゃんと聞けよ。ゆうちゃんの格言？ 的なや
つでちゃうよ。いいか。何悩んでんのかわからないけどさ、自分
の信じる道をまっすぐ進む。これだよ。もちろんさ、批判してく
るやつもいるよ。でもそんなの関係ねーんだよ。だって、自分の

人生の主役は、自分だろ？ (舞の頭をポンポンする)

舞 さすがゆうちゃんだよ、ゆうちゃんのお蔭で生きていけるよ。

犬 ワンワン、

ゆう わーびっくりした、

舞、美穂の日記を見つける。

ゆう なにそれ？

舞 あ、ううん、

ゆう せっかくだしさ、飲みにも行こうよ、まいちーの金で。

舞 えーもう、仕方ないなあ、

犬 ワンワン、

ゆう お前は来るな、
犬 くるん、

ゆう よーしレッツゴー。
舞 うん、

ゆうは去る。

舞、美穂の日記が気になって、手にとる。

美和子 そのノートは？

涼子 (面をとって) まいちーのおばさんが毎日つけてた日記帳らしいです。1年に1冊。そのときは確か12月で、ほぼその年1年の日記が書かれてたみたいです。

美和子 そこには何か書かれていたんですか。

涼子 すぐには読めなかつたらしいです。

美和子 どうして。

ゆう 怖かったんじゃないですか、自分の母親のことを知るのが。

店の電話が鳴る。

ゆう はい、「マウンテンバーゆうちゃん」。あ、どうも。ええ。予定通り来ました。ええ。そうです。道中お気を付けてください。はい。(切る)

涼子 ……あの人？

ゆう うん。これから来るって。

涼子 何時頃？

ゆう ああ、きけばよかったね。

美和子 誰ですか？

ゆう ねえ、

涼子 ……。

ゆう 本当にいいの？

涼子 ……決めたことだから。

ゆう うん……そっか。

美和子 誰が来るんですか？

涼子 さあ。

美和子 武藤舞ですか？

涼子 来たらわかりますよ。

沈黙。

美和子 きかせてもらえますか、話のつづきを。

涼子 まいちーはSさんの家に行きました。自分の信じる道を進んで、それをわかってもらうために。

5

佐由子の家。

佐由子の母・奈々子と、佐由子がいる。

涼子は面をつけて武藤舞となる。

奈々子 ええと、舞さん？ はなんのお仕事をされてるのかしら？
舞 あ、あの、えーと、
佐由子 ハンバーグ屋さん。だよな？ おどろきモンキーって、ほ
ら、街中にたくさんあるんでしょ？
舞 あ、はい、飲食店で。
奈々子 アルバイト？
舞 あ、はい、そうですね。
奈々子 ふくん。

沈黙。

奈々子 服買えないくらい貧乏なの？

舞 え？

奈々子 なんかくたびれた服きてるな〜って思ってる。

舞 ああ……。あの、すみません。

奈々子 佐由子から話はきいているんだけどね、なんていうのかな、
一緒にになりたい、っていうことなのよ。

舞 ああ、はい……。

奈々子 一緒になるっていうのはね、こう、経済的に自立するって
いうことなのよ。佐由子も、普通に仕事するっていうのは難しい
しよ、そのところ、どう考えてるのかしら。

舞 あ、ええと……。

奈々子 こう、うちのお金に期待されても困るわけなのよ。ね
え？ 一緒になるってそういうことでしょう？ それに、佐由子
はわからないかもしれないけれど、なんていうか、私、どうもあ
なたの見た目が好きになれないのよ。つまり、美人、とはいえ

ないでしょう、あなた。わかるでしょう？ ね？

奈々子と佐由子はいなくなっていて、ゆうがいる。

なぜか警察官っぽいコスチューム。

ゆうにすがりついている舞。

ゆう もーあんたやっぱ私がいないとダメなんだなあ。ブスで貧乏
なのをバカにされた？ そんなクソババはな、逮捕しちゃうぞ☆

舞 ……。

ゆう あんた今バカにしたでしょ。

舞 いや……。え、警察官になったの？

ゆう バカか。私が警察官になったら終わりだよ。埼玉滅びるよ。

舞 趣味？

ゆう 趣味じゃねえよ。半分趣味だけど半分趣味じゃねえよ。私は

さあ、ビッグになりたいんだよ。わかるよね？

舞 なにもわからない。

ゆう いい？ メディアコントロールっていうのは思ったより大

変だつてことがわかったんだよ、ノルマとかあるし。そこで私は

考えた。メディアよりもっと簡単にコントロールできて、かつ

もっと効果的なもの。そして私はひらめいた。なんだと思う？

舞 わからない。

ゆう 男だよ。

舞 わからない。

ゆう わからないことばかりだな。だから、いい？ 今、日本で

権力を握っている9割の人間が男なんだよ。

舞 そんなに。

ゆう うん、私の直感だけどね。つまり、その男をコントロールで
きれば、日本のほとんどの権力を握ったも同然なんだよ。

舞 わかるようなわからないような。

ゆう だからこの格好だよ。

舞 ……ん？ なに？

ゆう セクキヤバだよ！ セクシーキヤバクラ！

舞 あ、コスプレ！

ゆう だからセクキヤバだって！

美和子 そのコスプレはきつい。

ゆう だからセクキヤバだっつってんだろ。つかあんた話に入って
くんなよ。

美和子 はい。

ゆう だからね、こういうコスチュームを着て、男たちにガンガン
酒飲ませるの。でちよっとエロいこともするの。男の心をコント

ロールし、お金もサクサク儲けるの。

舞 はー。

ゆう で、今人が足りてないって話なの。どう？

舞 ……どう？

ゆう だから、ブスで貧乏だっって言われたんでしょ？

舞 え、あたしってこと？

ゆう そうだよ。

舞 ムリムリ、だっつてブスだもん。

ゆう だから、整形するんだよ。

沈黙。

ゆう あれ、きこえなかった？ 整形するんだよ。

舞 ……いやあ。

ゆう そんな構えなくて大丈夫だっつて。ちよつとした整形なんてみ
んなやってるよ。女性の9割は整形してるからね。

舞 そんなに。

ゆう うん、私の直感だけどね。私だっつてほら、ここにあったほく
ろ、なくなってるでしょ。

舞 地味っ。

ゆう いい？ 街を歩いてて、あ、かわいいなって思う女の人がい
るでしょ。あれ全部整形だから。

舞 そうだっつんだ…。いや、でもお金が…。

ゆう 大丈夫、給料前借させてあげるから。ね？

舞 でもさ…。

ゆう まいちーさ。あんたの人生このままでいいわけ？ よくない
よ。私だっつてさ、人生今のままでいいと思ってるわけ。いつか
はビッグになっつてさ、今まで私のことバカにしてきたやつをさ、
見損ないたいわけ。

舞 ……「見返したい」？

ゆう 細かいよ、一緒だよ。

舞 一緒ではないよ。

ゆう かわいくなっつてさ、金持ちになっつてさ、そのババア見返して
やれよ。

舞 ……今度はちゃんと言えたね。

ゆう オッケー！ ショウタイム！（舞を押す）

舞 わっ！

照明と音楽。

ひよつとこのお面をしたスタッフが現れ舞を布で隠している。
ひよつとこのお面をつけた客(男)も音楽にのっている。

ゆう さあて今日は新しい女の子が来店してきました！ キュー
トな笑顔であなたを悩殺。ナイスなボディが発するエロエロフェ
ロモンで、あなたをどこまでも骨抜きにすること間違いなし。そ
んな彼女の名前は、こ・こ・あ、カツラギココアちゃんです。
布が払われると、舞は目元だけ(さっきとまでとは違う)マスクをしてい
て、コスチュームも変わっている(ドレスとか制服とか)。

舞がかわいいポーズやエロいポーズをとるたびに、盛り上がる男たち。

舞 ってこんなこともやらされるの？

ゆう うちの店はこういうショーみたいなのもやるの。

舞 きいてないよお。

ゆう でもあんた変わったよ。

舞 え？

ゆう きれいになった。

舞 ……そう？

ゆう サービスタイム！

舞 え？

照明が暗めになり、ムードのある音楽。

舞の体に男たちが絡んでくる。

舞 あ。

スローになり舞にだけ光。
音楽は消える。

舞 強く求められている。私が。それは、初めてのことだったかも
しれない。男は好きではなかったけれど。悪くはないと思った。
求めて。求めて。もつと。そうなんだ。私には、魅力があるんだ。
整形してきれいになった私には、世界がそれまでより明るく見え
た。

男たちは去り、舞とゆうの二人。

ゆう 今月もお疲れ様。

舞 うん。(着替えている)

ゆう ぶつちやけさ、こんなによくやってくれると思ってなかった
よ。

舞 まあねー。

ゆう あんた店の外でけっこう貢がせてるでしょ。

舞 わかる？

ゆう 最近身に着けてるものが違うよ。

舞 うん、なんか言ったら買ってくれちゃうからさ。

ゆう 男をコントロールしてるな。

舞 ま。

ゆう 私たちがビッグになる日もそう遠くないかもしれないね。

舞 別に、あたしはビッグになる気はないから。

ゆう なんですか？ 全国统一しようよ。織田信長のごとくさ。

舞 うん、信長は統一できなかったけどね。秀吉だね。

ゆう 同じだよ。どっちも偉い侍だよ。世界征服しようよ。日本の

舞 首都埼玉にしようよ。私んち皇居にしようよ。

ゆう 明日、つか今日、また彼女の家にいくんだね。

舞 うん。

ゆう 相手は知ってるの？

舞 なに？

ゆう こういう仕事してるって。

舞 どうだろう。言っていないから。

ゆう うん、まあ、頑張ってる。まいちーなら、きっと大丈夫だよ。

舞 ありがとう。

美和子がいる。

美和子 やっぱそのコスプレきつくない？

ゆう だから、わかったよ、もう着替えるよ。

ゆうは去る。

美和子 それで、それからどうなつたんですか？

涼子 その前に、

美和子 ?

涼子 あなた、被害者のSとはどういう関係ですか？

美和子 ……ただの編集者ですよ。仕事として、この事件を追って
いるだけです。

涼子 いいですよ隠さなくて。

美和子 ……なにをですか？

涼子 武藤舞がもう一度家に来たとき、あなたもいましたよね？

萩尾美和子さん？

美和子 ……。

涼子 今は結婚して名字が違うみたいですけど、旧姓は島田ですよ

ね？

美和子 ……そうですよ。

涼子 ……。

美和子 でもこの事件を追っているのは仕事としてです。

涼子 もし武藤舞に会ったらどうします？ 警察につきだすか、そ

れとも…自分の手で？

美和子 わからないですね、それは。会って見ないと。特別、姉と

仲がよかつたわけではありませんから。全ての事情がわかつてか

ら判断します。

涼子 初めて武藤舞に会った日のこと、覚えてますか？

美和子 ええ。

涼子 きかせてください。あたしより、その場にいた人の方が詳し

いでしよう。

美和子 あれは確か、去年の春ですね。姉が家に連れてきたい人が

いるって言うてたんです。その人が、武藤舞でした。

佐由子と奈々子がいる。

美和子 はじめまして。佐由子の妹の美和子です。

舞 はじめまして、武藤舞です。

奈々子 この前来たときはいなかったよね？今日は珍しく仕事
が休みで、家でゴロゴロしてるの。ねえねえ週刊真相って知って
る？電車の中吊り広告とかによく載ってるじゃない？この
子ね、週刊真相で働いてるの。すごいよね。ねえ？

舞 そうですね、はい、すごいです。

奈々子 ほらほら名刺名刺。

美和子 ああ、はいはい。(名刺を渡す)

奈々子 でも忙しいみたいでさ、彼氏なんかつくってる余裕ないみ
たいなのよ。

美和子 そうなのよ。

奈々子 大学のときなんかはさ、旅行代理店だっけ？10歳年上
の、イケメンと付き合ってたのね。

美和子 しょうもないやつだったから。

奈々子 で、あの、ひとつきいていい？

舞 はい。

奈々子 顔変わった？

佐由子 え？

沈黙。

舞 はい、整形しました。見た目が好きではないと言われたので。

佐由子 え、え、

舞 ごめん、なんだか言いそびれちゃって。でも、私はよかったと
思ってます。自分の見た目に、少しは自信ついたから。

美和子 (奈々子に小声で) ……違う顔だったの？

奈々子 あのー……んーとね……そういうことじゃないのよね。だ
から、それは方便なのよ。なんていうかな、察してほしかったの
よ私。つまりね……女同士でしょう？

舞 ……。

奈々子 だから……ダメなのよ。

舞 そんなこと一言も言ってませんでした。

奈々子 だから察してほしかったって言うてるじゃない。ねえ？
わかるでしょう普通。っていうか、そこまでしつこい理由ってな
に？やっぱりうちのお金をあてにしてるの？

舞 そんなもの必要ありません。毎月宝くじ2000枚買っても生
活に余裕があるくらい稼げるようになりました。

奈々子 買ったの？

舞 買ってません。

沈黙。

奈々子 佐由子ね、ダメよこういう人にひっかかっちゃ。

佐由子 ……？

奈々子 ねえ、もう別れなさい。あなたたち、よくないわ。

舞、悔しいがどうしようもない。

舞 ……失礼します。

佐由子 まいちー。

奈々子 佐由子。(立ち上がる佐由子を座らせる)

佐由子たちは去り、学生服を着ているゆうが現れる。

舞はゆうに泣きつく。

ゆう なるほど、うざいババアだな。

美和子 (現れて) そのかつこうもきついよ。

ゆう だから入ってくんなよ。ねえまいちー、私はさ、やつぱり人を愛せることって言うのは素晴らしいことだと思うんだよ。わかる？ 人生において、ビッグになるっていうことよりさ、人を愛するっていうの方がさ、すごく重要だと、私は思うわけ。

舞 ?

ゆう 実は、私今度結婚することになってさ、けっこう年上だし連れ子もいるんだけど、でもあの人すごく優しいんだよ。ちよつとまいちーの知ってる一番優しい人思い浮かべてみる。

舞 ……。

ゆう その人の50倍優しいんだよ。

舞 めっちゃ優しい……!

ゆう それでさ、もう落ち着こうと思つてさ。なんか私も疲れちゃったしさ。そう、それで、あの店まいちーに任せようと思つて。大丈夫、まいちーならやつてけるよ。お願いね。

舞 (ゆうの腕をつかむ)

ゆう なに不安なの? あ、彼女のこと? 愛せる人が見つかったんならさ、絶対その人のこと離しちやダメだよ。駆け落ちでもな

んでもいいからさ。絶対一緒になるんだよ。

舞、去っていく。

ゆう (美和子に) って言ったらさ、ほんとに駆け落ちしちやつたんだよ。

ある路上。

美穂が傘をさして、スーパーの袋をぶらさげている。孤児のカナが濡れながら座り込んでいる。

美穂は傘にいれてやる。

カナ、美穂を見る。

沈黙。

カナ、傘から出る。

美穂、傘に入れる。

カナ、また出る。

美穂、また入れる。

カナ いいよ。

美穂 いいから。

沈黙。

美穂 お母さんは？

カナ いない。

美穂 (袋の中身をあさりながら) なんか食べる？

カナ いいよ。

美穂 食べなよ。

カナ 捨て犬かよ。

美穂 あんたどことなくうちの犬に似てるのよ。

カナ ……。

美穂 捨てられたの？

カナ ……。

美穂 私も捨てられたわよ。子供に。駆け落ちってやつ？

カナ ……。

美穂 来る？

カナ その子供の代わりに？

美穂 ……。

カナ でもおばさん、金持ってなさそうだよ。

美穂 あんたそんな金かかんなさそうだから。

カナ (美穂の袋の中からなにか食べる)

カナは美穂についていく。

奈々子の家。

奈々子が落ち着きなくうろついて、立ったり座ったり。追うように美和子も現れる。

美和子 落ち着きなよ。

奈々子 警察いけばいいのかしら。

美和子 相手されないよ。

奈々子 だって、誘拐でしょ。

美和子 駆け落ちだよ。

奈々子 誘拐みたいなもんでしょ。

美和子 姉ちゃんだってもう大人だよ。

奈々子 一人じゃなんにもできないじゃない。

美和子 やめなよ。そうやってバカにするの。

奈々子 ……バカになんかしてないじゃない。

美和子 してるよ。

奈々子 やっぱり警察行こうかしら。

美和子 お母さんに、ひとの恋愛邪魔する権利ないと思うよ。

奈々子 だって、あの人はダメじゃない。

美和子 お母さんは誰でもダメなんだよ。私が彼氏連れてきたら、

絶対バカにしたもん。

奈々子 だってそれはよくない人を連れてくるから。

美和子 あのさ、私、結婚するから。

奈々子 ……は？

美和子 今月には婚姻届け出すから。

奈々子 相手いないじゃない。

美和子 いるよ。

奈々子 きいてないわよ。

美和子 言つてないもん。

奈々子 なんて言わないの。

美和子 バカにするから。

奈々子 それは、人によるわよ。

美和子 バンドマン。

奈々子 バンドマンはダメよ。

美和子 ほらね。そうやって彼のこと知りもしないでダメっていう。

どうせしようもないやつだと思ってるんでしよう。

奈々子 バンドマンはみんなしょうもないのよ。

美和子 しょうもない人もいるけどしょうもなくはない人もいるの。

来月から新居に住みますので、お世話になりました。

奈々子 本気？

美和子 本気。

奈々子、黙って座り込み、ため息。

奈々子 どこで、育て方間違ったのかしら。

美和子 私たちの育ち方は正しかったと思うよ。育ち方を間違えた

のは、お母さんだよ。

奈々子 ……信じられない。

美和子 ……お世話になりました。

美和子は去っていく。

美穂の家。

カナがやってきて座る。

追うように美穂が現れる。

美穂 ねえ。あんたさ。

カナ ……。

美穂 なんなのその態度。私のなにが気に入らないわけ？

カナ ……。

美穂 おい。(カナの身体を揺する)

カナ ……。

美穂 だからさ、言いたいことがあるらば言えればいいじゃない。

カナ ……。

美穂 別にいいのよ、出てっても。

沈黙。

カナ ……ひとつ言っていていい？

美穂 なによ。

カナ ガキかよ。

美穂 は？

カナ あんたガキだよ。

美穂 ガキはあんたでしょ。

カナ だから捨てられたんですよ。

美穂、カナを殴る。

カナ そうやって自分の思い通りにいかない手が出る。

美穂 自分の立場わかってんの？ 出てってもいいのよ。

カナ そうやって自分が見放したら生きていけないと思いきませる。でもきいたことがあるよ。親は自分が育てられたように子供を育てるって。

美穂 ……。

カナ 要はさ、あんたもそうやって育てられたってことだよ。思い通りにいかなかったら殴られて、脅して。そしてなるべく間違わないように親の顔色ががって。自分が親になったらそれを繰り返してる。

美穂 あんたになにがわかるのよ。

カナ あんたが自分の子供の話をしてるのきいてたらわかるよ。だから子供に捨てられた。

美穂 ……。

カナ 自分のお母さんは生きてる？

美穂 ……どっかで生きてんじゃない？

カナ 知らないの？

美穂 知らないわよあんな親。

カナ ほら、あんただって自分の母親捨てたんだろ。だから今度は捨てられた。

美穂 ……。

カナ でも私は思うよ。こういう悲しい繰り返しは、どこかでやめなきゃいけないって。だからさ、頑張ってみようよ。私たちふたりで。

美穂 まだ間に合う？

カナ うん。だって人生まだまだ長いからさ。

美穂 ……そうね。

カナ 私も頑張るから。

美穂 ねえ…少しだけ、泣いていい？

カナ うん。じゃあ私も。

カナ、美穂を抱きしめる。

二人静かに泣いてみる。

7

音楽。(G線上のアリアとか)

その音楽の中、舞と佐由子は、自分たちの新居にやってきて、

舞はご飯を用意して、二人で食べて、

食べ終わると佐由子は手探りで食器を片付けて、

舞は仕事の支度をし、

二人はキスをして舞は仕事に出かけ、

佐由子は眠りにつき、

舞は帰ってきて食器を洗い、

佐由子の隣で眠る。

二人は目覚め、

舞はご飯の用意をして二人で食べて、

食べ終わると佐由子は手探りで食器を片付けて……を3度繰り返し返す。

4度目、佐由子が目を覚ますと、

舞は隣にいなかった。

佐由子は食卓に座り、しばらくしてもう一度眠りにつく。

目を覚ますと、やはり舞はいなくて、

佐由子は食卓に座る。

音楽がなくなる。

佐由子は、かごめかごめの鼻歌を歌っている。

舞が戻ってくる。

舞の面は、鬼になっている。

舞 ……うん、ごめん、お店大変でさ、

佐由子 ……。

舞 怒んなよ。

佐由子 ……。

舞 なに？ なにか不満？

佐由子 あの…病院に行ったんだけどさ。

舞 ……病院？ 風邪でもひいた？

佐由子 クラミジア。

舞 ……。

佐由子 なんで？ 私まいちーとしかエッチしてないよ。

舞 ……。

佐由子 (舞にしがみつきのながら) ねえまいちー、誰と何したの？ 知

ってるよ。まいちーもてるんでしょ。知らない香水の匂いがつい

てることあるよ。誰なの。一人じゃないでしょ。ねえまいちー、

誰なの？ 何したの？ ねえまいちー。

舞は佐由子に倒されている。

舞 仕方ないだろ。佐由子の分まであたしが稼いでんだから。文句

あるの？ あたしが何しようとかあたしの勝手でしょ。

佐由子 もう外に出ないで。もし一度でも外に出たら、私のお母さ

んにこの住所と性病うつされたこと教えるよ。そしたら私のお

母さん、まいちーのこと、きつと殺しに来るよ。

舞 ……。

佐由子 ねえ、まいちーはどこにも行かないよね。ずっと私のそば

にいるよね。大丈夫。買い物くらい私ひとりで行けるよ。

音楽。

佐由子は食卓に座り、舞は食事を作り、

二人は食べる。

佐由子 前々から思ってたんだけどさ、もっとおいしくつくれない

の？

音楽。

舞は食器を片付け、皿洗いをする。

その間に佐由子は家を出て戻ってくる。

二人は寝る。

佐由子 ねえ私が出かけてる間に外出たでしょ。

舞 出でないよ。

佐由子 出たでしよわかってるから、出たに決まってる。お母さんに連絡しようか。

舞 出でないって。出でない出でない出でない。

音楽。

舞は起き、食事を作る。

食卓で二人で食べる。

佐由子 だーかーら、味付けが濃すぎんの。あーあお母さんの料理食べたいなあ。帰ろうかなあ。

舞 ごめんごめんごめんごめんごめん。

音楽。

舞は食器を片付け、皿洗いをする。

二人は一緒に寝て、舞は佐由子の首を絞める。

佐由子 もっとしめて、もっともっと。ああ、ああ、愛してる。愛してる。あ、あ、もう離して、まいちー？ 離して？ まいちー？

舞はそのまま佐由子の首を絞め続ける。

佐由子はそのまま息絶える。

舞、座り込んでしばらく黙っている。

舞は歩き出し、包丁を手にして戻ってくる。

佐由子の隣で包丁を自分の胸に刺そうと思うが、ふと、美穂の日記が目に入り、刺すのをやめる。

舞は、美穂の日記をパラパラとめくり、そのうちの1ページをめくる。

美穂の声 どうしてこんな子供を産んでしまったのだろうか、ずっと後悔している。そもそも、私は子供なんていらなかった。この子ができてしまい、あの男と結婚することになってしまった。やはり、あのとき墮ろしておくべきだった。生まれた子供は、自分の子供とは思えないほど、顔が悪かった。口では愛してると言っていたけど、あの子を愛したことなどなかった。端的に言うと、あの子は失敗作と言うほかなかった。

舞は、日記をとじ、激しい動悸に襲われる。

舞は、大声で吠える。

舞は、包丁を手に、外に出て行く。

※無料版はここまでです。ご覧くださりありがとうございます。全編はクラアク芸術堂の販売ページ(左のURL)から購入できます。ありがとうございます。

<http://www.clark-artcompany.com/public>

あとがき

札幌の女史たちを集めて舞台をつくることになった。当初はコメディの予定だったが、演出からコメディの演出をするのが難しいと言われ、ある殺人事件を題材に書いてくださいと言われて資料を渡された。ということで、当初明るく笑える話にしようと思っていたのに、結果、いつも通り暗くて悲しい話になってしまった。

この作品は、ある殺人事件の真相を探りに、その犯人の居場所の手がかりをつかみに編集者が犯人の知人と思われる人物から話をきくという形式で、多くのシーンは回想のような形で進んでいく。サスペンスではよくある手法だ。こういうサスペンスを書いた経験は、思い返してみればあまりなかったので苦戦したが、いい経験になったと思う。

キャストは全員女性なのだが、女性推しという感じでもなく（設定上かわいい役も美人の役もないし）、たまたま男が出てこない話、という印象になったので、よかったと思う。

今回は札幌女史会 vol.1 という企画だったが、札幌女史会 vol.2 があるのかどうかは今のところ未定だ。評判が良ければまたやりたいと思うので、次が観たい方々はツイッターなどで盛り上げてほしいなと思う。

2018年1月17日 ことばあきひろ

《上演記録》

クラアク芸術堂 presents 札幌女史会 vol.1 『たかが愛の歌よ、』

【キャスト】

萩尾美和子 塚本奈緒美

沢尻涼子 朱希 (劇団・木製ボーイジャー14号)

島田佐由子 工藤舞子 (劇団パーソングズ)

下山ゆう 相馬日奈 (弦巻楽団)

武藤美穂 脇田唯 (POST)

島田奈々子 青木玖璃子 (YUS)

カナノ犬 八木友梨 (クラアク芸術堂)

【スタッフ】

演出・宣伝美術 山木真綾 (クラアク芸術堂)

舞台 米沢春花 (NPO法人コンカリーニョ)

照明 山本ゆか

衣装 大川有沙実

小道具 蝦名紗友水 (COLORE)

演出補佐 くじらん

演出助手 田邊幸代 (クラアク芸術堂)、佐藤智子 (クラアク芸術堂)、

檜山真理世 (クラアク芸術堂)

制作 野澤麻未

脚本・プロデューサー こさべあきひろ (クラアク芸術堂)

【日程】 2018年1月19日 (金) 21時

20日 (土) 13時 / 17時

【会場】 ターミナルプラザことにPATOS

【料金】 前売2,000円 当日2,500円

※実際の上演内容と一部異なる場合があります。ご了承ください。

《『たかが愛の歌よ、』の上演について》

「前売入場料2000円未満」または「公演予算100万円以下」の場合は、脚本使用料は無料です。それ以外の場合は、協議の上、総予算の3%程度を脚本使用料とします。上演のお問い合わせはクラアク芸術堂企画運営委員会まで。

【クラアク芸術堂企画運営委員会】

clark.artcompany@gmail.com

2018年1月17日 第1刷制作

小佐部 明広 (こさべ あきひろ)

1990年、札幌生まれ。北海道大学法学部卒業。2011年に「劇団アトリエ」を結成し、2017年に「クラアク芸術堂」に組織変更。人間の暗部ややりきれない部分を書くことが多いが、コメディやナンセンス、ファンタジーなど作品のジャンルは多岐にわたる。2017年から平仮名名義「こさべあきひろ」としての執筆活動も開始。TGRアカデミー第1回奨学生。『瀧川結芽子』で若手演出家コンクール2015優秀賞。『ある映画の話』が札幌劇場祭TGR2017特別賞。

クラアク芸術堂ホームページ

<http://www.clark-artcompany.com>

